

奥野健男文学論集 ①

奥野健男 文学論集

泰流社

奥野健男文学論集I

発行——昭和五十一年九月十日第一刷

著者——奥野健男

発行者——西村允孝

発行所——泰流社

112 東京都文京区小日向二—十八—四

電話 〇三(九四七)〇七三〇

振替 東京〇—一六三七六五番

印刷所——誠之印刷株式会社

製本所——松岳社 株式会社青木製本所

© by Takeo Okuno, 1976.

0095-11001-4447

目

次

第一部 「日本文学の病状」

第一章 歴史的にみた病因

自然主義文学の挫折——自然主義は日本文学を毒しているか……………九

屈折点・明治四十三年……………三

田山花袋再評価……………六

漱石文学の可能性——ひとつの結節点『道草』……………三

漱石火山脈……………三

プロレタリア文学運動の欠陥——小林多喜二をめぐって……………三

戦後文学の展望……………八

第二章 創作と批評

批評の機能……………七

創造の心理的メカニズム……………二

第三章 現在の病状

危険な芸術至上主義——再版『近代の超克』……………三

文学に特效薬はない……………七

あやまれる民主主義文学——保守的「進歩的文学」……………二〇〇

組織と人間……………二〇二

思想と心理……………二〇四

動脈硬化症の老大家……………二〇九

不毛の世代の文学……………二一五

なぜ日本文学に傑作が生まれないか……………二二二

第四章 日本文学の方向……………二二七

「日本文学の病状」あとがき……………二二九

第二部

フローベール・ゾラ・モウパッサンの印象……………二八三

アランの死……………二八四

自己告白とその仮装——鳴海仙吉をめぐって……………二九〇

現代への発言——評論……………二九八

新人直言——まず壁を打ち破れ……………三〇一

統一された評論……………三〇三

純文学の通俗化に反対する……………三二五

リベラタン
無頼派作家の再評価……………三二六

第三部

心理主義文学論……………二六五

新聞小説論……………二九三

純文学と大衆文学……………三〇四

大衆という虚像……………三〇八

私小説と自己探検の文学……………三一九

私小説の困難性……………三二三

私小説滅亡の危機……………三三七

戦後文学と「性」……………三三九

サディズムとマゾヒズム……………三四五

解題……………三四七

奥野健男文学論集1

装
幀

中
野
佳
子

第一部 「日本文学の病状」

第一章 歴史的にみた病因

自然主義文学の挫折

——自然主義は日本文学を毒しているか

現代の日本文学の貧困については、多くの人から繰返しいわれて来た。とくに日本の文芸批評家たちは、まるでそれをいうためにだけ存在して来たような観がある。そして日本文学の持っている欠陥の、現象的な指摘はほとんどいつくされてしまったといってもよい。

日本文学には社会性がない。社会との有機的なつながりがない。思想性がない。想像力が乏しい。ドラマが見られない。虚構がすくなく、面白くない。視野が狭小で、身辺雑記的なものが多い。心理小説が育たず心境小説しかない。民衆の生活と遊離している。社会変革の意志を持たない。古い美の感性に頼り過ぎていゝ。作家の生活と作品とが密着し過ぎてゐる。全体に退嬰的であり小粒であり、とうてい大文学など生まれない。等々列挙すればきりが無いほどである。これらの指摘はいちいちその通りであつて、これに反対する者はいないであらう。

しかし、では一体これらの欠陥をどのように克服し、日本文学をどのように発展させて行くかという具体的な論になると、急にさびしくなる。それらの論の基礎になる、なぜ日本文学にこのような欠陥が生じたかというその病因についての分析や追求も、はなはだあやふやにしかなされてゐない。ただ日本文学にはこれ

がない、あれがない、これではだめだ、とかけ声をかけているだけである。

そして作家や批評家の日本文学批判の基準はつねに外国、とくにヨーロッパの文学との比較の上になされている。フランスにはこのような小説があるが日本にはない。イギリスの文学はこのように進んで行ったのだから、日本の文学もこのように進むべきだ。すべてこのようなロジックで批判がおこなわれて来た。それは空間的な未来はあっても、時間的な未来のない後進国の、避けがたい劣等感によるものであったろう。だがあらゆる作家、批評家の顔が、海の向うの文学の動きにばかり向いていて肝腎の日本の現実とまともに対決し、その中から自律的な発展を考えようとした者の余りに少いのを驚く。

今の日本の現実がどのような文学を欲し求めているか、どのような方向に発展するのがほんとなのか、どこがいちばんの弱点になっているかを、日本の社会構造と日本人の自我の構造と美意識とに対応させつつ考えて行く、これがぼくの日本文学を考えるときの基本的な態度である。

そしてぼくは現代においては、文学の新しい発展、動向を、文学史の中だけにその原因を探し求めても、決して発見することができないことを知っている。現実から切離した文学の自律性というものに期待することができない。文学史をもその中に含めている大きな歴史の流れ、現実の中にそれを求める以外にない。

以上二つのあまりに自明な、しかし一向に実行されていない事柄を前提にして、日本文学を考えて行きたい。

さて冒頭に挙げたような日本文学のさまざまな欠陥の原因として、多くの批評家たちは、まるで合言葉のように「日本文学は自然主義的である」「自然主義が日本文学を毒しているのだ」という。そして新しい文学運動といえたいい合せたように「反自然主義、自然主義文学観からの脱却」を旗じるしにする。たとえば「日本の自然主義は好むと好まざるとに拘らず、凡ての日本の作家の作品に浸潤していること。その浸潤は

殆ど抜き難いまでに強いこと。……この点については今更、説明する必要もありません」とか「それこそ自然主義的文学観の、骨がらみと言うべきだ」（『メタフィジック批評の旗の下に』）とか、繰返し強調されている。それはもう疑うことのない公式となつてしまつたようだ。

日本文学に思想性がない、それは自然主義に毒されているからだ。社会性がない。想像力に欠ける。それも自然主義文学観のためだ。すべての欠陥を自然主義のせいにする。どんなことでもそこに持つてくれば片付いてしまふ便利きわまりない公式である。だがそれだけのことで事態は一向に片付いてはいない。自然主義が日本文学をどのように毒しているのかという、具体的な解析になると、不思議なほどやられていない。第一、自然主義という概念がきわめてあいまいなのだ。使う人々によつて、めいめい勝手に都合よく使っている。読者も自分の持つている自然主義のイメージで、勝手に解釈して受けとつてゐる。日本文学を毒しているといわれる自然主義とは、どういふ内容なのかをまずはっきりさせておかなければならない。

多くの場合日本の文学は自然主義的だというとき、それは十九世紀フランスの、特にゾラを中心とした自然主義ではなく、日本に移入され、特殊な歪みを持つて発展した自然主義を指すのが普通のようにだ。「日本の自然主義」ととくに断る場合もある。そして、その場合のいちじるしい特徴は、私小説と重複した意味で、さらには私小説と同義語に使われている事である。「自然主義ないし私小説的文学観」などと並べて使われることもある。日本の文学が自然主義的であるということが私小説的であるということと同じだとすれば、大分意味ははっきりしてくる。私小説が日本文学を毒しているということであれば、賛否は別として、いわんとするところはよくわかる。しかし果して自然主義と私小説とが同じもの、あるいは非常に近いものなのであろうか。「自然主義ないし私小説」というとき、人々は明らかに一つの定理を肯定して、あるいは鶴呑みにして使つてゐるのだ。それは、小林秀雄、伊藤整、平野謙などによつて唱えられ、中村光夫の『風俗小説論』によつて確乎とした公式になつた文学史観である。それは「国民文学派」の文学者たちも、また近代

文学史の研究者たちも肯定し、もちい、一般の読者には絶対的な定説のように受けとられてしまっている、自然主義から私小説が生まれたという説である。つまり自然主義は藤村の『破戒』の方向に正統に発展すべきであったのに、花袋の『蒲団』の出現により、わが国独特の狭小な私小説、心境小説の方向に屈折してしまつたという有名な理論である。だが自然主義文学は花袋の『蒲団』から一直線に、私小説につながっているのであるか。中村光夫によると、「一口に云へば、この間（三十九年から四十年の二年間）に『破戒』と『蒲団』との決闘が行なわれ、その闘ひは少くも同時代の文学に対する影響については『蒲団』の完全な勝利に終つたのです。『春』はこの点から見れば、藤村の花袋に対する降伏状であつたわけです。花袋の勝利は徹底的であり、且つ無慈悲なものでした。ちやうど敗者の一家眷族が根絶やしにされる昔の戦争のやうに、『破戒』の系列は作者自身からさへ見捨てられて、文壇からまづたく抹殺され『蒲団』の子孫ばかりが繁栄して文壇の主流を形造つた……」（『風俗小説論』）といつてゐるが、果して『蒲団』の成功が『破戒』の方向を『春』の方向にまげたのであろうか。臼井吉見は『近代文学論争』のなかで「モデル問題論争」から藤村の作品の流れを実証しつつ、こういつてゐる。『破戒』は、そのまま『春』『家』の自伝小説へつづくであらうか。内面には、無論一すじ道であることにはすでにくりかえし述べてきたとおりでである。近代日本文学が『破戒』から『春』『家』の方向へ屈折することなく、まづすぐに『破戒』自体の方向に向つたならば、などという仮定そのものがどんなナンセンスかは、もはやいふを要しまい。」そしてさらに『蒲団』発表以前に『春』の腹案がなつてゐたことを書簡により実証できるから、『春』は花袋とは無縁だといつてゐる。実際藤村の『春』『家』は花袋の『蒲団』につながるものではなく、また自分の青春や家を描いてゐるからといつて、その後いわれてゐる意味の私小説、心境小説とはまづたく質の異つた小説であると思う。

花袋の『蒲団』における自己曝露の安易な成功が、その後の日本文学を誤つた道に進めた、というのが通説になつてゐるが、ほくにはそう思えない。かえつて花袋の『蒲団』の道は、日本の近代文学の發展上正し

い方向であったと考えるのだ。少くとも藤村の『破戒』の意義に対し、花袋の『蒲団』は今日、不当に蔑視されているように思える。花袋の『蒲団』は、藤村の『破戒』の持つ一つの方向を当然推し進めた結果生まれた作品なのだ。作品の充成度からみれば『破戒』がまさっているが、それは『破戒』においては、作者の内部と外部のリアリズムが、一つの均衡を保っているからに他ならない。ただしそれは内部のリアリズムも外部のリアリズムもともに前近代的な未熟なたちにおいてである。明治三十八年から四十年の頃の社会構造の急速な変化は、このような均衡を破らずにはおかない。『破戒』的な古風なあいまいな自我が、新しい現実に対応できなくなったため、もう一度自我の内部を曝露し批判しようとしたのが、花袋の『蒲団』である。これは自我の内面的リアリズムへの第一歩であり、その方向がさらに進められたとき、新しい現実に対応した批判的リアリズムが生み出される可能性があったのだ。がそのことはもつと後になって述べたい。

ともかく花袋の『蒲団』が、私小説、心境小説の元祖だという説は、ぼくには信じ難い。自然主義文学がそのまま私小説につながっているわけではない。宇野浩二は「私小説の元は私は白樺ではないかと考へてゐる」(『私小説』私見)と大正十四年にいっているが、むしろ今日いう意味での私小説、心境小説は反自然主義を称えた白樺派からはじまっているのではないか。志賀直哉が自分の目に入ってくる以外の現実を、強引に抽象することによって成立させた芸術が、私小説と呼ばれるものではないのか。そういう意味での私小説的文学観が、日本文学を毒しているということならば納得することができる。しかしそれは自然主義文学とは直接に関係のないことだ。もちろん自然主義との、歴史的な関係や、文学観の影響などが見られるであろうが、それは自然主義のせいというより、近代日本文学全体の問題である。

自然主義文学が、私小説と同一でないとするれば、日本文学を毒している自然主義とは、何を指すのであろうか。社会主義リアリズムの立場からは当然、日本の文学が、いまだに自然主義リアリズムに低迷している、という批判を下すことができる。それはたしかにその通りであるが、日本文学の自然主義的偏向という場合、

それだけではなさそうである。とするとそれは藤村、花袋、秋声、白鳥らの推進した明治末期の自然主義文学運動そのものと、その影響について向けられていることになる。そして日本の自然主義の誤れる理解の仕方に対してはもちろん、ゾラなどの自然主義の考え方も、今日の日本文学を毒しているというみかたである。前者に限っていえば、日常性に密着した瑣末主義、身辺雑記的なりアリズム、日本の仏教的な無常感と融合した消極性、宿命感などを指摘することができであろう。

しかし日本の作家も批評家も自然主義の病毒を強く受けているため、メタフィジックな文学が生まれない、というような批判は、本来の自然主義そのものに対する批判と考えられる。日本の文学者は、フィジカルな、つまり形而下的、自然科学的な目で文学を見過ぎるから、ヨーロッパ文学のような形而上的な思想に支えられた文学が生まれないという批判である。

さらには反自然主義という主張が、じつはそのまま反リアリズムという意味を含んでいると思われる主張もある。日本の現実から遊離している文学を擁護するための理屈づけに用いられる場合もあるようだ。

このようなあやふやな立場によって自然主義をさまざまな内容に解しながら、いっせいに自然主義に日本文学が毒されているといい、反自然主義文学を唱える。あいまいな概念で自然主義を頭から非難し、反自然主義の方向にのみ日本文学の未来をみるような安易な文学観によっては、むしろ得るものより、失うものの方が多いのではないか。自然主義が当初持っていた積極的な精神——それは今日の文学においても必要な——を否定してしまふことになりはしないか。

たとえば自然主義文学運動の代表的評論家島村抱月は「自然主義はひとり真 (Truth) を写すといふ」(『文芸上の自然主義』)、「文芸上の自然主義は文明対自然、精神対物質、理想対現実といふ所まで、一般思想上の主義と通じてゐる。けれども吾人の見る所を以つてする時は、両者は此の点を追分にして相別れるものである。文明に対して自然を見、精神に対して物質を見、理想に対して現実を見るとは、一方から言へば既成物